

質問介入の治療的多重性の考察

鳥越 淳一^{*1}

本稿は精神力動的な心理療法、特に精神分析におけるセラピストの質問介入の機能について考察することを目的としている。考察にあたり、クライアントとの情緒的コミュニケーションを促進する質問介入の例として対象指向質問 (Spotnitz 1969) と不飽和質問 (Busch 2010) を取り上げた。これらの質問は、話者の意図を明確化するタイプの質問介入とは異なり、セラピーやセラピストに対するクライアントの情緒的抵抗を解決するために企図されているところに大きな特徴があり、クライアントの自由連想を促進するのに有効と考えられる。しかし両者は主に米国で実践されてきたアプローチであるため、日本で使用するためには、文化・言語的差異を踏まえ、日本語臨床に適した形に修正する必要がある。この差異の考察に関して、本稿では対象指向質問における主体性の取り扱い方に焦点を当てる。それは英語圏では対象指向質問を使う際、主語の“you”を省略することでクライアントの脆弱な自己を守るように配慮されているが、日本語ではこの“you”に相当する主語は通常省略されてしまうためである。筆者は、英語がコミュニケーションの主体である公的自己を重視する言語であるのに対し、日本語は意識の主体である私的自己をより重視する言語であるという仮説に基づき、日本ではクライアントの発言の自由 (私的自己の側面) を強く保障することで、クライアントの有する脆弱性を保護できるのではないかという考えを提起する。また、この例として「あなたの仮説はなんですか?」という質問介入を取り上げ、日本の臨床でクライアントが自由連想を安全に行うためには、個人の思考や感情の不可侵性 (私的自己の不可侵性) を保証することが重要であるという可能性を論じる。

..... キーワード

質問における治療的多重機能 抵抗への介入としての質問 情緒的交流としての質問

1. 問題と目的

“Why do we ask questions?” —2010 年春、ボストン精神分析大学院で現代自我心理学者の Fred Busch はこのように題した未刊の論文を基に、精神分析を研究・実践する学生やセラピストを対象に講義を行った⁽¹⁾。“なぜ私たちは質問をするのか?” その非常に素朴な問いかけに、当時、聴講生の多くが衝撃を受け、面接の中でセラピストがクライアントに質問をすることの意義につい

て考えた。Busch は論文の冒頭で、50 年以上前に Olinick (1954) が精神分析理論において“質問ほど精密に検証されていないものはない” (p.57) と指摘したが、30 年後に Boesky (1989) が同じ点について論じており、さらに 20 年後の現代でも依然その問題は解決されていないと述べている。Busch 曰く“精神分析では質問の役割が長く蔑ろにされてきた…私の印象では、我々はいくらにも多くの質問を、いくらにも数少ない理由で行う。私たちは未だに質問をすることに関する理論を有していないのだ” (p.3) と。

精神分析は自由連想を主な治療的アプローチとして取り入れているが、通常、“質問”には“私 (質問者) に分かるように話してください”という期待が込められており、具体的な内容や話し方が暗

2013 年 9 月 25 日受理

Consideration of Multiple Therapeutic functions of Therapists' Questions

*1 Junichi TORIGOE

日本橋学館大学リベラルアーツ学部

に指示される。それは“内容に囚われず、自由に、好きなように話して下さい”という自由連想の教示に含まれるメッセージとは基本的には相反するものである。Busch は、セラピストのクライアントに対する問いかけが、分析過程における、連想的で、創造的な、そして、しばしば非合理的ですらあるが、自由な、クライアントの思考を阻害してしまうと批判し、質問の背後にあるセラピストの動機（逆転移）がクライアントに与える影響に言及している。Schneider (1991) は、セラピストの「質問」に含まれる言語的・非言語的のメッセージの二重性に着目し、質問がどのような意図を有し、クライアントに受け取られるか（発話内効力 illocutionary force）、そしてその結果として、質問がどのようにクライアントに作用するか（発話媒介効果 perlocutionary force）という語用論の観点から検討している。たとえば、セラピストが、クライアントの連想内容を特定の理論におさめようとする場合、そこで発せられる質問は、形式上は疑問形であっても、クライアントにはセラピストがある種の考えを押しつけようとしていると体験される。

精神分析治療という、ある目的に向かって構造化されている場面で、セラピストの介入が、たとえ質問であってもクライアントにとっては何かしら意味深いものとして体験されうるのは想像に難くない。Lacan (1998) は、クライアントが分析家を人の苦しみに関する膨大な知識を有する専門家（「知を想定された主体」）と見なしており、極端にまで暗示にかかりやすくなっていることを指摘している。ほかにも、クライアントの有するこの種の被暗示性・受身性は精神分析の歴史の中で度々問題になっており、セラピストの介入が、クライアントの主体性の成長を促進する要因にもなれば阻害する要因にもなりうるというテーマは長く議論されてきた。

その中で最も多くの関心を集めてきたセラピストの介入は間違いなく「解釈」であり、その侵襲性については様々な批判がなされ、臨床的配慮や工夫が講じられてきた。ところが「質問」は、同

じ介入であるにも関わらず、「解釈」と比べて議論されることが少ない。著者が知る限り、この傾向は米国に限ったことではなく、日本でも精神分析療法において、影響因として話題になるのは解釈であり、質問そのものが議論の対象になることは主流ではない⁽²⁾。

そこで本稿は、質問というセラピストの介入行為を分析対象とすることが、精神分析ひいては力動的心理学療法にどのような意味をもたらすかを考察することを目的とする。これに際して、クライアントの主体性の成長に焦点を当てて考案され、実践されている二つの質問形態—現代自我心理学派の Busch の不飽和質問 unsaturated question と現代精神分析学派の Spitz の対象指向質問 object oriented question —を例として取り上げ、従来型の質問と比較し、より具体的に論点を浮き彫りにすることを目指そうと思う。また両質問形態はその刊行物の少なさから⁽³⁾、日本ではあまり知られていないと思われるため、これらの概念の紹介も兼ねたい。そして最後に、日本の精神分析臨床ではどのような質問が治療的に効果がありそうか、その可能性についての仮説を提唱する。

2. 精神分析療法における2つの治療戦略的質問

2.1 Busch の質問に対する姿勢と不飽和質問の治療的価値

Busch (2010) の質問に対する基本的な立場は、“精神分析では、私たちは、以前は知られていなかったものを知ることを目指しているわけだが、多くの質問は単に心を既に知っているものに向けるだけである” (p.4) という見解や“質問を尋ねることの問題は答えを得てしまうことである” (p.3) という見解の中に現れている。すなわち、Busch は質問にはある種の回答を求める力が内在しており、その回答に意識が方向づけられてしまうと、“自由な”連想が、さらには無意識の営みが阻害されてしまうと認識している。たとえば、“どう理解していますか？ (How do you understand that?)” という問いがクライアント

のある有益な情報につながりうることを認めながらも、ほとんどの場合、クライアントの具体的で合理的な思考を刺激してしまい、治療的な退行状態（例えば、talking-as-dreaming Ogden 2007）を阻害してしまうと問題視している。その他、よくある、この種の意識的な回答を求めてしまう質問の例として、“どのように感じられましたか？（How did that feel?）”、“どのようにそれを理解していますか？（How do you understand that?）”、“もっと話してくれませんか？（Can you tell me more?）”などを挙げている。

Busch は、セラピストがこれらの質問を行う際“クライアントの無意識を探索したい”“興味関心を示したい”、“何かを与えたい”といった理由をよく挙げるが、その背後にはセラピストの疎外感やクライアントが向けてくる敵意ないし性愛化転移への不安、知らないことに直面したときの無力感などの逆転移感情があることを指摘している。セラピストに生じる特定の情動の喚起はクライアントの状態を知る重要な手掛かりになりうるが、一方で、転移・逆転移が認識されず、治療的に活用されない場合には弊害となりうる。Busch は上記の質問が弊害となりうる場合の問題を二つ挙げている。一つは、質問がセラピストの考え（たとえば、何を重要と考えているのか）をクライアントに伝えてしまい、クライアントがそれに囚われてしまうことで、セラピーの中心にセラピストが位置付けられてしまうという問題。もう一つは、治療過程において顕在化してくるセラピストへの抵抗が、質問に答えを出すことで、迂回されてしまうという問題である。Busch はこれら“セラピストがセラピーの中心に位置付けられてしまう”問題と“抵抗の迂回”問題を度々同時に取り上げており（1992、1993、1995、2006）、Busch にとって両者が精神分析技法論における重要な課題として関連付けられていることが伺える。

そして、これらの二つの問題に共通して Busch が注目しているのがセラピストやクライアントの知性化である。許容できない感情や思考を意識から排除することを“抵抗”と定義するならば

（Freud 1926）、クライアントにとって抵抗とは極めて合理的で妥当なものである。Busch の論じる“抵抗の迂回”とは、まさに抵抗という情緒的問題が知性化・合理化されることで一応の決着がついてしまうことを指しており、この迂回が成立する状況でセラピストはセラピーの中心に位置付けられ、クライアントの自我はセラピーの過程に参加できず、セラピーをセラピストが解釈するがまま、受動的に体験してしまうようになる。

Busch（1993）は、『「乱暴な」分析について』（1910）で Freud が論じたセラピストの理解力とクライアントの洞察力の深刻な隔たりを例に、現代でも数多くの解釈が、クライアントが何に耳を傾けることができるかではなく、セラピストが何を理解しているかに基づいて行われていると述べ、いかにクライアントの自我を解釈の過程に参加させることが精神分析治療に重要であるかを説いている。同じ点に関し、Searl（1936）は、クライアントが気づいていない幻想や感情を解釈することを“内容欠如 absent content”の解釈と呼び、それが“セラピストは万能である”というクライアントの幻想を徒に強め、ひいては、クライアントの自我は与えられるものだけを受け入れる受動的な存在になってしまうと指摘している。また、Schneider（1991）は、理論が色濃く反映されているタイプの質問を“理論提唱型質問 theory-proposing questions”と命名し、この種の質問がクライアントには命令として体験されやすいことを論じている。解釈にせよ、質問にせよ、セラピストの介入がクライアントの理解を置き去りにして行われるとき、クライアントは成長を止め、セラピーはセラピストの知性化が支配してしまうことになる。

こうした理論的見解を踏まえ、Busch は、セラピストとクライアントのやりとりの中に生じる抵抗を知性化によって表面的に決着をつけるのではなく、情緒的に向き合えるように促すことを提案している。そして、その手段としての質問を、知性化で飽和させないという意味で「不飽和質問」と呼んでおり、その典型的な尋ね方を“私はある

ことに気づきましたが、あなたはそれにお気づきでしょうか？ I noticed something. Can you notice it to?” (2010, p.17) としている。Busch は、この種の質問が (1) 特定の内容を尋ねたり、何が正しいかを示唆しておらず、クライアントの意識を特定の事柄に方向付けていない、(2) 代わりに、セラピストの理解している事柄がどれくらいクライアントの前意識にあるのか (すなわち、どれくらいクライアントに解釈を受け入れる準備ができているのか) をアセスメントしている点で、“(〇〇について) どう理解していますか？” など、クライアントを特定の事柄に意識づける上記の「よくある質問」とは機能的に異なると論じている。

Busch は、何かを知ることよりも、知る過程の方をより重視しており (2009)、“私は気づいた I noticed” という表現を自己観察能力の現れ、さらには自我の解釈過程への積極的関与が可能であることの現れであると注目している (2007)。こうしたセラピストの知性化を抑え、クライアントの情緒的な関与を促すという点で、Busch の治療過程は常に一貫しており、不飽和質問もまたこの過程を進める目的で治療戦略的に使われていることが伺える。

2.2 Spotnitz の質問に対する姿勢と対象指向質問の治療的価値

一方、Spotnitz (2004) は、質問を含むあらゆる介入は、抵抗を解決するときのみ使われるべきであるとの見解を示している。Spotnitz にとって、抵抗は言語化されず行動や身体化を通して現れるものであり、対象との関係上、常に存在しうるものであった。具体的には“治療破壊性の抵抗”“現状維持の抵抗”“分析の進展に対する抵抗”“協力することへの抵抗”“終結への抵抗”の5つの抵抗が、セラピーの進行に沿って (セラピストとの関係の中で) 現れてくると論じられている。Freud (1926) もまた5つの抵抗 (抑圧抵抗、超自我抵抗、イド抵抗、疾病利得、転移抵抗) を挙げているが、Freud の抵抗概念は、何が抵抗の源になっているのかという個人内要因への言及であり、どのようにセラピスト・クライアント間

で生じてくるかへの言及ではなかった。この意味で Spotnitz の論じる抵抗は対人間における心理的な摩擦現象を指しており、治療過程のどの段階でも出現し、いつ現れるかによってその意味するものも異なってくると仮説立てられている一例えば、自由連想ができなくなるという抵抗は、治療から逃げたい・台無しにしたいという現れ (治療破壊性の抵抗) かもしれないし、セラピーを終わらせたくない現れ (終結への抵抗) かもしれない。

摩擦は熱を生む。抵抗とは人と人との摩擦であり、そこには緊張あるいは興奮という熱が生じる。脳神経学者でもあった Spotnitz の理論では、脳には緊張 (興奮状態) を低減し一定に保とうとする恒常性原則が存在するという考えが中心にあり、Spotnitz の介入はすべて、この緊張低減と恒常性の維持に集約されうるといっても過言ではない。Spotnitz (1958、1961、1967、2004) は高まった心的緊張の沈静化が、何らかの自我機能を犠牲にすることによって遂行される場合を自己愛防衛 narcissistic defense と概念化し、病理として説明している。それは、例えば、思考が断片化したり、何も感じられなくなったり、身体化が生じるなど、対象への攻撃を回避するための自己攻撃を意味しており、対象指向質問は、まさにそうした自己への攻撃に特徴付けられた、対象と関わる抵抗への介入方法の一つとして提唱されている。

Margolis (1994) は対象指向質問とは“患者の注意を自分自身の自我から様々な対象や外部の出来事に向けること”であり、それは“その人の名前はなんですか？”“その映画はどのようなものですか？”“私がそんなふうに思っている？” (p.35) といった第三者やセラピストを主語にとった形式になると説明している。また、その治療的機能については、コミュニケーションに対する抵抗の解決、安全な治療の場の形成、情緒的供給 emotional feeding、自己愛転移の促進効果の4つを挙げている。これら4つの機能は相互に関与し合っていることが多いが、特に治療の初期段階においては密接に関係しあっている。すなわち、自己愛転移は、クライアントがセラピストを自己

の一部あるいは双子のような存在と体験できるくらい自我親和的に感じられることによって特徴付けられるが、それはクライエントの体験する刺激量を最適に保つことで形成される安全な治療空間を意味する。クライエントの体験する刺激が過多であった場合、“話す”ことで刺激を低減できるようサポートし、刺激が過少であればセラピストが言葉をかけることによって調整される。つまり、対象指向質問は、それに対する回答を得ることよりも、クライエントが一人では対処しきれない緊張状態を調節し、クライエントが安全だと体験できる場が形成されることに価値をおいて行われる。

また上記のように、対象指向質問が自我の保護的機能を担えるのは、クライエントの主体（you）に直接アプローチしないことで、クライエントが自己を攻撃対象とすることを回避できるからである。自己への過度の焦点付けが、心的緊張を高め、自我の脆弱性を作り出すという点に関しては、精神分析領域以外からも、多くの研究が報告されている。例えば、Fenigstein ら（1975）は、自己意識を自分の容貌や言動などが他者からどのように見られるかという「公的自己意識」と他者には直接知ることのできない自分の感情や思考に注意を向ける「私的自己意識」に分け、その発達の分化について論じている。彼らによれば、他者の視点から自己を見る公的自己意識が発達し始めるのは早ければ10歳であり、15～16歳には公的自己意識の高まりから自意識過剰になる。こうした公的自己意識の発達は、社会的規範や道徳という面からも重要であるが、一方、精神健康面では様々な支障をきたし始める。鍋田（1997）は、公的自己意識と私的自己意識の二つの自己意識水準から対人恐怖症における自己意識を調査し、臨床群は公的自己意識が高く、他者との関連性で自己に高い意識を向けていることを論じている。また、Carver & Scheier（1981）は、人は自己に意識が向くと、理想の自己と現実の自己との差を知覚し、その差を縮めようと動機付けられるが、それが埋めがたいと認識されると、転じて逃避欲求が高まると論じている。

Spotnitz の対象指向質問とは、まさにこうした過度な自己への焦点付け外しであり、過剰な自意識が自己攻撃に転じるクライエントをサポートし、安全に自由連想を営める環境を作ることを目的に用いられている。

3. セラピストの問いを議論することの意義：従来型の質問との比較

Busch の不飽和質問と Spotnitz の対象指向質問は、考案された理論的背景は異なるものの、抵抗に取り組んでおり、そこには質問の言外のメッセージが作用しているという点で共通している。Schneider（1991）はセラピストの言語的介入が治療的になるためには、言語的水準と非言語的水準のメッセージが完全に一致していない方が良く、受け取る側がメッセージの意味を多重に解釈できることが重要であると論じているが、Busch と Spotnitz 両者の質問はまさにそうした多重性を帯びている。Busch の「気づいていますか」という不飽和質問は、「はい」「いいえ」で答えられる形式であるにも関わらず、「はい」「いいえ」では答えられないものの存在を示すと同時に、どれだけ抵抗に向き合える耐性ができているかのアセスメントが行われている。Spotnitz の対象指向質問の目的は、内容に対する回答そのものではなく、自我に対する焦点づけが外されること（攻撃性への矛先が自我から対象に移されること）や、セラピストの言葉が情緒的供給 emotional feeding となることを目的としている。

こうした質問の使い方は、精神分析において伝統的に認識されてきた「質問」と明らかに異なる。過去に日本人も多く留学し、日本における精神分析に大きな影響を与えたメニンガークリニックの創設者 Karl Menninger は、セラピストの介入を質問、明確化、解釈、直面化の4つに分類し、この順序で介入が行われることを推奨している（小此木 1982）。意識化されなければならない無意識の内容は、解釈によって直面化されるが、解釈を行うためには、クライエントの問題を明瞭に知る必要があり、質問はそのために行われる。すなわ

ち、質問は明確化を目的とした手段であり、解釈は直面化を目的とした手段となっている。『精神分析セミナー II：精神分析の治療機序』では Menninger の理論・技法をベースに「質問」に関して次のように説明されている。「…治療過程の順序から言うと、質問—明確化というのが、まず、一番初めに治療者として用いる技術です。それはどういうことかということ、患者さんが発するいろいろなコミュニケーションの中に、あいまいな点がたくさんありますが、当然、そのあいまいな点は治療者にはよく理解できないわけです。その点について質問をして、あいまいなところはあいまいなものとしてはっきりさせる。」(1982 p.109) 知を伝えるためには、その知の獲得が先に必要であるため、解釈・直面化から質問・明確化への逆行はあり得ない。この意味で、Menninger が提唱する介入は直線的・一方通行的であり、何を聞いているか極めて明瞭である点で多義性を含まない。

この従来型の治療プロセスでは、無意識に対して無知な、あるいは無知でいたいと切望するクライアントに、目を背けてきた何かを洞察することが期待される。発見(洞察)をテーマとしたこのモデルの営みを Freud は考古学に喩え、この治療方針を掲げる多くの分析家たちは自分たちをシャーロック・ホームズのような探偵になぞらえた。見つけ難いところ(無意識)に何か重要なものが隠されているというのは、言い方を変えれば、まだ知られざる重要な何かセラピーの前から存在していることを意味しており、クライアントの言葉はその何かの在処を指し示すヒントとして理解される。質問はクライアントから与えられたそのヒントをより正確に理解し、心的構造に変化を起こしうるその何かの場所を特定するために行われ、最後にその何かに到達できるのは解釈によってのみである。

ある唯一の真実が既に存在しており、その追究を中心的命題とするという認識は客観主義的立場に立脚している。このアプローチをとるセラピストの中には、精神分析の営みを実験に見立て、条

件をなるべく統制しようと心がける者もいる。Freud のブランク・スクリーンの概念はその最たる例であり、セラピストはできる限り自分自身の逆転移(精神的葛藤)に汚染されず、できる限り純粋にクライアントの投影を映し出すスクリーンになることが奨励された。近年では Eagle (2000) が、セラピストが面接の中で体験することを全てクライアントからの心的圧迫(投影同一化)として捉える傾向を現代版のブランク・スクリーンと呼んで批判しているが、いずれも治療におけるある種の純粋性を前提としており、条件の統制を行うことでそれを取り出せると見なしている点で客観主義的立場に立っていると見なしうる。同様に、精神分析における介入は解釈しかないという考えは一部の分析家にとっては今でもなお真実であるが、この立場も解釈のみしかクライアントに影響を与えられないという効果の純粋性あるいは他の介入にはない固有性を前提としている点で客観主義的な認識論に立っている。この観点からすると、質問は解釈の下準備であり、“正式な”介入ではない。少なくとも解釈と質問にはクライアントに与える影響の程度に差があり、その意味で解釈は質問に優る介入であると認識されている。こうした伝統的な客観主義的パラダイムにおいて、セラピストが求められることは正しい「説明」であり、クライアントに求められることは正しい「洞察」である。

このような説明・洞察モデルに対して、Spence (1982) はそもそも治療因子になりうるものは化石のように心の奥底に埋もれているのではなく、セラピストとクライアントの間に生成されるものであると論じている。こうした観点からすると、セラピストの解釈の意義は、解釈内容が正しいかどうかではなく、クライアントが新しいものを生成することにどのように貢献したかで評価される。セラピストとクライアントに求められるものは共に「探索」であり、その中心的命題は「知の発見」ではなく「知の生成」である。そのため、このモデルにおけるセラピストの「質問」は明確化の手段あるいは解釈を行うための前段階

での情報収集作業とは見なされない。質問と解釈は探索という目的のための手段であり、どちらの手段もクライアントの行動に影響を与えうると見なされる。

セラピストの質問という介入行為を議論の対象にするということは、従来から行われてきた解釈第一主義の治療プロセスの見直しである。それは、Busch や Spotnitz が明示しているように、言外におけるセラピスト・クライアント間の相互作用の強調を意味する。質問をするということは影響を与えるということであり、質問を受けるということは影響を受けることである。この視座はセラピストが質問を行う介入場面で自己の主体性を、そしてクライアントの主体性をより強く意識することにつながりうる点で大きな問いかけであるように思う。

4. 日本における臨床的活用の展望：経験からの仮説

質問が、Busch が指摘するように抵抗の迂回に利用されたり、Spotnitz が論じるように情緒的な供給を与えたり、脆弱な自我を守ったりする言外の働きをすることは、複数のメッセージを持ちうるという言葉の特性から文化を超えた普遍的な事象として捉えることが可能であるように思われる。しかし、どのような表現やアプローチが有効かは言語の特性、さらに言えば、文化の特性に依拠すると思われる。たとえば、Spotnitz は脆弱な自我に取り組むにあたり、クライアントへの問いかけの中で“you”という主体性に直接問かける言葉を避けた。それは、you という言葉がクライアントの自己に対する焦点づけを強め、自己攻撃を強めてしまうことへの懸念があるためである。しかし、この方略は、私たち日本語を母国語とする臨床家にとっては感覚的に分かりにくいところがある⁽⁴⁾。それは、日本語には英語の人称代名詞に対応する語が存在しないと言われており（鈴木 1973）、人称代名詞の不在が英語圏の人には理解しにくいように、人称代名詞を省く日本人からすると対話において you の不在がどのよ

うな影響を及ぼすのかを感覚的に理解することは難しい。

また、自己の捉え方も日本語と英語では異なってくると考えられてきた。廣瀬・長谷川（2010）は、日本語が意識の主体である「私的自己」中心の体系であるのに対して、英語が伝達の主体である「公的自己」中心の体系であることを論じ、対人関係に応じて使い分けなければならない言語表現が日本語に極めて多いのは個としての内的な自己意識が非常に強いから、かえって外的な対人関係に敏感にならざるを得ないからだと結論づけている⁽⁵⁾。

言語が私たちの文化や思考の仕方を反映していると仮定すると、クライアントの緊張・不安が高まっている際に Spotnitz が you を避けたのは英語という言葉がそれだけ you という言葉に敏感であり、公的自己を強く意識してしまうような構造があるからなのではないだろうか。廣瀬・長谷川（2010）が示唆する論点を踏まえると、公的自己の体系が本質ではない日本語の場合には、you に相当する公的自己表現「あなた、君、お宅様」などを避けることは異なる配慮が必要になるように思われる。日本語の本質が私的自己の体系にあるのであれば、公的自己を本質とする英語が公的自己に介入したように、日本語臨床では私的自己に介入することの方が、脆弱な自我を守るという目的に対してより高い効果を発揮するのではないだろうか。たとえば、筆者の経験では、「〇〇さんの仮説はどのようなものですか？」という質問は臨床で有効であることが多い。言葉に詰まるクライアントも、このような尋ね方することによって話しが促進されることが多い。一方、「〇〇さん」というクライアントの個人名は、英語でいう you と同等の公的自己の表現であるが、個人名を呼ぶことでクライアントの緊張が高まり、話せなくなるということは臨床経験上あまりないように思われる。もしこのような受け答えの傾向がより広く言えるのであれば、日本語において公的自己（あなたやお宅様という指示代名詞や、〇〇さんというような固有名詞）の有無はさほど

重要ではなく、むしろ私的自己在表現されることの自由の確保がより重要であるように思われる。上記例で言えば、クライアントの「仮説」を尋ねることによって、クライアントの語りは語り手個人の思考に帰属されるものであり、セラピストに侵襲されない不可侵領域であることのコンセンサスを示すことになりうる。公的自己在本質的な体系である英語では公的自己在表現を弱めることで侵襲的感觉を低減しうるのであれば、私的自己在本質的な体系である日本語では私的自己在表現を強めることで、すなわち、個々人の思考と感情の自由の不可侵性を強調し保障することで同じ目的を達成しうるのかもしれない。

5. まとめ

本稿では、自由連想法を用いる精神分析療法において、セラピストが質問するという介入行為にどのような意味があるのかを論考した。その際、日本ではあまり知られていない Busch の不飽和質問と Spotnitz の対象指向質問を紹介しながら、質問に言外の意味を持たせ活用するという、従来の明確化を目的とした質問とは質的に異なるタイプの質問形態を概観した。そして、日本語臨床におけるセラピストの問いを考えるにあたり、Spotnitz が対象指向質問において you という指示代名詞の回避を提起し論じたのに倣い、「自分」という表現に日本語独自の文化的特徴を見いだしている長谷川・廣瀬 (2010) の言語比較論を土台に一つの仮説を提示した。

まだ議論が少ない領域であるが、セラピストがクライアントに問いかけるというのは重要な瞬間である。日本ではクライニアンや独立学派の功績によりプレ・エディパルという言葉や心性になじみが深くなってきているが、その前言語期の問題に対するアプローチは未だ解釈 (言語的介入) に留まっている印象がある。質問をはじめ、介入に含まれる言外のメッセージの治療的活用がより議論されることで、力動的心理学療法の可能性がさらに広がっていくことを期待したい。

(注)

- (1) その他、Busch は同論文を 2010 年 12 月に Toronto Psychoanalytic Society & Institute, 2011 年 12 月に New Orleans-Birmingham Psychoanalytic Center にて発表している。
- (2) たとえば、神田橋 (1984) は、セラピストが「なぜ」と問うことがいかにクライアントに対して有害になりうるかについて論じているが、精神分析療法や力動的心理学療法の実践を多く掲載している心理臨床学研究や精神分析学研究においてセラピストの質問行為そのものが治療因として分析対象になることはほとんどない。
- (3) Busch の不飽和質問は近年提唱されたばかりの概念であり、Spotnitz の対象指向質問は 1974 年に神田橋・坂口によって翻訳された『精神分裂病の精神分析』で紹介されているが、本質問形態を治療に用いているという事例報告は、少なくとも心理臨床学研究と精神分析学研究の両学会誌の中では著者 (2009, 2011, 2013) 以外の論文では見当たらない。
- (4) 韓国語を母国語とする精神分析家も筆者と同じ見解をもっており、英語で考案された対象指向質問を自国語に適応して使う際には何らかの工夫や修正が必要であると考えている。
- (5) 廣瀬・長谷川 (2010) は、この論拠として日本語には英語の「I」に相当する公的自己在表現する言葉 (僕、私、俺、小生など) が多様にあるが、「I」のように対象が誰でも公的自己在を表すために普遍的に使える固有の言葉がないこと、そして英語には日本語の「自分」に相当するような私的自己在を固有に表現する言葉がないことを指摘している。

文献

- Boesky, D.: 1989, "The questions and curiosity of psychoanalyst", *Journal of American Psychoanalytic Association*, 37 : 579 - 603 .
- Busch, F.: 1992, "Recurring thoughts on unconscious ego resistances", *Journal of American Psychoanalytic Association*, 40 : 1089 - 1115 .
- Busch, F.: 1993, "In the neighborhood: Aspects of a good interpretation and a 'developmental lag' in ego psychology", *Journal of American Psychoanalytic Association*, 41 : 151 - 176 .
- Busch, F.: 1995, "Resistance analysis and object relations theory: Erroneous conceptions amidst some timely contributions", *Psychoanalytic Psychology*, 12 : 43 - 53 .
- Busch, F.: 2006, "Countertransference in defense

- enactments”, *Journal of American Psychoanalytic Association*, 54 : 67 - 85
- Busch, F.: 2007, “‘I noticed’: The emergence of self-observation in relationship to pathological attractor sites”, *International Journal of Psychoanalysis*, 88 : 423 - 441 .
- Busch, F.: 2009, “On creating a psychoanalytic mind: Psychoanalytic knowledge as a process”, *Scandinavian Psychoanalytic Review*, 32 : 85 - 92
- Busch, F.: 2010, “Why do we ask questions?” Lecture in Boston Graduate School of Psychoanalysis. Presentation in Toronto Psychoanalytic Society & Institute. URL: http://www.torontopsychoanalysis.com/calendar_details.php?id=65 (as of 3 / 18 / 13)
- Carver, C.S. & Scheier, M.F.: 1981, “Self-consciousness and reactance”, *Journal of Research in Personality*, 15 : 16 - 29 .
- Eagle, M. N.: 2000, “A critical evaluation of current conceptions of transference and countertransference”, *Psychoanalytic Psychology*, 17 : 24 - 37 .
- 神田橋条治：1984、『追補 精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版
- Fenigstein, A., Acheier, M.F., & Buss, A.H.: 1975, “Public and private self-consciousness: Assessment and theory”, *Journal of Personality and Social Psychology*, 37 : 75 - 86 .
- Freud, S.: 1910, “‘Wild’ Psycho-Analysis”, *Standard Edition*, 11 : 219 - 228
- Freud, S.: 1926, “Inhibitions, symptoms, and anxiety”, *Standard Edition*, 20 : 77 - 178 .
- 廣瀬幸生・長谷川葉子：2010、『日本語から見た日本人—主体性の言語学』、開拓社
- Lacan, J.: 1998, “The Four Fundamental Concepts of Psychoanalysis (Vol. XI)”, In, *Miller, J. (ed.). The Seminar of Jacques Lacan*, New York: W.W. Norton & Company
- Margolis, B. D.: 1994, “The object-oriented question: A contribution to treatment technique”, *Modern Psychoanalysis*, 19 : 187 - 198
- 鍋田恭孝：1997)、『対人恐怖・醜形恐怖—「他者を恐れ・自らを嫌悪する病い」の心理と病理』、金剛出版
- 小此木啓吾：1982、『精神分析セミナーⅡ 精神分析の治療機序 岩崎学術出版社』
- Ogden, T. H.: 2007, “On talking-as-dreaming”, *International Journal of Psychoanalysis*, 88 : 575 - 589
- Olinick, S. L.: 1954, “Some considerations of the use psychoanalytic technique”, *Journal of American Psychoanalytic Association*, 2 : 56 - 66 .
- Schneider, P.: 1991, “The analyst’s questions to the patient: Implicit aims and functions”, *Contemporary Psychoanalysis*, 27 : 552 - 573 .
- Searl, M. N.: 1936, “Some queries on principle of technique”, *International Journal of Psychoanalysis*, 17 : 471 - 493 .
- Spotnitz, H.: 1958, “Strengthening the ego through the release of frustration- aggression,” In *Psychotherapy of preoedipal conditions*, Northvale, New Jersey: Jason Aronson Inc. 1995 .
- Spotnitz, H.: 1961, “The narcissistic defense in schizophrenia”, In *Psychotherapy of preoedipal conditions*, Northvale, New Jersey: Jason Aronson Inc. 1995 .
- Spotnitz, H.: 1967, “Techniques for the resolution of the narcissistic defense”, In *Psychotherapy of preoedipal conditions*, Northvale, New Jersey: Jason Aronson Inc. 1995
- Spotnitz, H.: 1969, *Modern Psychoanalysis of the schizophrenic patient: theory of the technique*. New York: Grune & Stratton, Inc. (神田橋条治・坂口信貴訳：『精神分裂病の精神分析』岩崎学術出版、1974)
- Spotnitz, H.: 2004, *Modern psychoanalysis of the schizophrenic patient: theory of the technique 2004 second edition*. New York: YBK Publishers.
- Spence, D.: 1982, *Narrative Truth and Historical Truth: Meaning and Interpretation in psychoanalysis*, W.W. Norton: New York.
- 鈴木孝夫：1973、『ことばと文化』岩波書店
- 鳥越淳一：2009、「Joining による自己愛転移抵抗への介入」『精神分析学研究』53 巻 3 号：322 - 329
- 鳥越淳一：2011、「沈黙する精神病患者との前言語期的コミュニケーションの探索—逆転移のナラティブ」、『心理臨床学研究』28 巻 6 号：763 - 774
- 鳥越淳一：2013、「静かなる解釈が作り出す分析空間」、『心理臨床学研究』31 巻 1 号：72 - 82

Consideration of Multiple Therapeutic functions of Therapists' Questions

Junichi TORIGOE^{*1}

Synopsis

This paper aims to consider the function of therapists' questions in psychodynamic oriented psychotherapy, especially psychoanalysis in Japan. Object-oriented questions (Spotnitz 1969) and unsaturated questions (Busch 2010) are introduced as examples of questions to facilitate emotional communication with clients. Unlike the type of question often asked to clarify the speaker's intention, these questions are designed to work through the client's emotional resistance to the therapy. I argue that the questions Spotnitz and Busch propose could help therapists understand the therapeutic relationship with their clients better, but that it is necessary to modify the form of these questions in Japanese clinical situations due to cultural and language differences between English and Japanese. On this point, I focus on how the subject is treated in object-oriented questions, because object-oriented questions are meant to protect the vulnerable self of the client as a speaker by avoiding the pronoun "you" in English culture and language, but the subject "you" is normally omitted in Japanese. Then, I suggest that object-oriented questions in Japan could serve in a way comparable to the object-oriented question in English by emphasizing the client's ("your") freedom of speech-i.e. private self-as not being violated by others. This notion is based on the hypothesis that the private self, the subject of consciousness, plays a more important role in Japanese, while the public self, the subject of communication, is primarily significant in English. This is discussed with a question such as, "What's your assumption?" from my clinical experience as an example of question to promote clients to freely express what they think or feel. I argue the possibility that protecting clients' individual right to think and feel the way they do - i.e. ensuring inviolability of the private self - may be quite important in engaging in free-association safely in Japanese clinical situations.

Key words

Therapeutically multiple functioning question, therapist's question as intervention in resistance,
question as emotional communication

^{*1} Faculty of Liberal Arts Nihonbashi Gakkan University